

### 猪3 猪の禍い = = = 猪・鹿・狸より

秋になって稲が色づく頃には、山田を耕している者は一晩でも安閑としてはおられなんだ。わずかばかりの冷田の作代であるが、文字通り猪の襲来がはげしくて、絶えず脅かされていたのである。収穫間近の煽られるような忙しい中を、日が落ちてからヤトウを幾十本となく矧いで、何でも今夜が危ないなどと、暗がりを出て、猪の路（ウツ）へ立てにいった。ある時父の後からついて行ったことがある。あの峯から来ると教えられて、真っ黒に茂った雑木山を、不安な目で仰いだものだった。柴山から田のク口へ続く崖の下へ、矢来のように隙間なくヤトウを立てたものである。



ヤトウ

ヤトウはヤトとも言うて、矢竹のやや太いものを三尺ほどの長さに切り揃え、穂先を鋭く尖らせたものだった。表の端で麦棹など焚いて、一本一本尖を炮って、竹の脂肪気を去って鋭くしたのも、古くから続けてきたことらしかった。ヤトウは本来オトシアナの中に立てて、陥ちた猪を突き刺すための物の具であったが、別に崖の下、垣根の内等にも置いて、獲物を捕ることに使った。単に猪を嚇すための、防禦の具に用いたのは、せつない時の思い付きであったかも知れぬ。それを作る矢竹の茂りが、山の所々に、まだ忘れてように残っていた。

猪に荒らされた後の稲は、まことに情容赦もないことだった。わけて子持猪にでも出られたが最後、目も当てられぬ狼藉であった。喰う以上に泥の中へ踏みにじって、たまたま免れたものは、稲扱（いなこ）きにでもかけたように、粒が悉く糞ってあった。猪は穂の幾つかを、一口に啜えて引きたぐるらしかった。空穂がひよろひよろ風に吹かれているのを見て、思わず涙を零したとは、現にたびたび聴かされたことである。その上にも後の始末が、並大抵の面倒ではなかった。それと見た隣の田では、まだ青い穂並みをむざむざ刈り取るさえあった。焼米にしても、猪に喰われるよりまだとも言った。思えば憎い憎い猪だった。晩方仕事の隙を見て、そっと狩人の家へ走ったのも、よくよく遣瀬なくてのことである。

猪一つ捕ってくれたら酒の一升ぐらい出してもかえってありがたいと、つい約束もしたのである。鳳来寺村長良（現鳳来町）の一つ家の話だった。それから狩人が猪を舁いで来て表に休むたび、酒一升分の価を払い払いしたが、屋敷廻りの猪はちっとも減らないで、狩人たちがとんでもない遠方から、わざわざ廻り路をして舁いで来ることが判って、慌てて約束を取り消したと言う。

村の某の（定吉という）男だった。屋敷脇の甘藷畑へ毎晩のように猪が出て片っ端から甘藷を掘る。終には宵の口から来ている。それである晩鉄砲を用意して待っていて、当たりもすまいと思って放したのがつい撃ち殺してしまった。夜が明けて見てさすがに当惑した。狐や兎とちがって三〇貫もあるものを、三人や四人の家内で、喰って片づけることもできなんだ。ちょっと動かすにも男の手には余るほどで、売ることはもちろん、隣近所へ分けてやることも、狩人たちの思惑が案じられた。万一警察へでも密告されたら、辛い目に会うにきまっている、現在そうした話をあちこちで聞いていた。さんざん頭痛にした果てに、女房の縁故を辿って、近間の狩人に情を明かして引き取って貰ったが、それまで二日二晩の間、猪の骸に筵をかけて、畑の隅に匿しておいたと言う。でもその狩人から幾干かの分け前を貰ったが、えらい気苦労を考えると、滅多に猪も撃たれぬと零していた。

いずれにしても厄介千万な猪だったのである。